

---

# 見た目で判断は禁物 !?

桜桃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

見た目で判断は禁物 ！？

### 【Nコード】

N4035M

### 【作者名】

桜桃

### 【あらすじ】

オリキヤラ視点です。

いつろーんなキャラが続々と登場！！

興味のあるかたはどうぞ♪

この話は、名探偵コナン 自作小説  
にも掲載されています。

## 双子！？（前書き）

北海道民が書いた大阪弁。

ぜーったいに変です。

だけど、笑わず見てください。

双子！？

合コン週三回も通い詰める大学三年の夕月里美。今日は運のいいことにイケメンメンバー勢ぞろい！最高のパラダイスよ！

「里美ちゃん、今日も可愛いね。」

「ふふっそんなこと」

（あるに決まってるでしょ。）

「ぜってー行かねー！ー！」

「そう、硬いこというなよ。」

「可愛い子がいるんだって。」

「そんなの知らねーよー！」

彼は・・・工藤新一！？絶対ゲットしてみせる！

つかまった工藤君はブスツとして麦茶を飲んでいる。

「ねえ、工藤君。どんな子が好み？」

「ほら、座れよ工藤。そして、質問に答える。」

「はあゝ。好みは天然でお人よし。料理が上手で子供好き。泣き虫クセして我慢強い奴。かな？」

「へゝ結構私料理するんだよ??」

私は必死でアピールする。しかし彼は「ふーん」の一言。

「ねえ、工藤君って恋人いないんでしょう？」

「ああ。」

ラッキー

P R R R R

『新一？』

「蘭か？」

『うん。あのね、今和葉ちゃんたちと軽く食べに行くんだけど。』

「服部も来てるんだよな？いやな予感がするぜ。」

『とりあえず、今向かってるんだ。後で電話するね。着いちゃったし。』

「は？」

「一体誰と電話しているのだろう。」

「悪い。俺今から抜けるわ。」

皆がブーイング。

そのとき、

「あれ？新一？」

「工藤なにしてんのや？」

「工藤君？なんやココ。合コンみたいやけど。」

「合コン？」

女の人の顔に青筋がたった。

「ちがうんだ！無理やり・・・！！」

バキッボキッ

「私がコナンの育児をしているときあんたは・・・」

「ちょいまち。工藤がこんなところ来ると思うか？」

いきなり色黒の男が言ってきた。

「そやね。工藤君、蘭ちゃん一筋やもん。」

「そうかな・・・でも、ごめんね。疑って。」

「いや別に気にしてないさ。悪いけど今後こういつことはしねーでくれねーか？」

「なんでだよ！恋人いないんだろ！？」

そうよ！恋人はいないって言ってたわ。

「確かに、恋人はおらんや？工藤。」

「ああ。」

「だったら！」

「でも、嫁はんならおるんや。」

「「「は？」「」」

私と七瀬君、そして秋音は声をそろえた。

「そう、ついでにこの子は息子のコナン。」

うそでしょ？ゲットする 予定 ハズだった工藤君が奥さんがいて  
息子もいる！？

「そんな話聞いてねーぞ。」

「だって言ってるもん。」

工藤君って二十一歳だよな？

「帰るわ。」

「あ、ああ。」

開き直った工藤君にあきれた七瀬君であった。

だが、我にかえった七瀬君が思いついたように言った。

「なあ、突然だけど工藤ん家いかねえ？」

「ナイスアイディア！」

そう秋音が言った。今週の日曜日に米花公園に待ち合わせだ。

\*\*\*\*\*

「工藤ん家は・・・」

私達は絶句した。世の中にこんな大きな家があるのだろうか。

ピンポン

「はあい。」

可愛い声が聞こえてくる。

「あら、あのときの・・・」

声の持ち主は私達を入れてくれた。

「あの、工藤君は？」

「今は事件で。」

子供は寝ていた。私達に紅茶を出してくれた。

「蘭ちゃん！平次知らへん・・・！？」

ポニーテールの女の子が私達を見て驚いている。

「あんたら、工藤君と昨日おった・・・何しに来たんや！？」

「い、いいのよ和葉ちゃん。私が入れたの。それに服部君は新一と事件よ。」

「そうなんか。あとでしばいたる！」

ピンポン

カチャ

「蘭さん。新しい薬が出来たの。よかったら飲んでみて。栄養剤よ。あら、工藤君は？」

「ん、事件だつて。」

「あの人も飽きないわね。」

「ふふつでしょう？」

何この子。ガキのクセに工藤君と呼び、私達を圧倒させるこのオーラ。そして薬。この子を作ったの？

「哀ちゃん。うちにもほしいな。」

「貴方にはこれ。一時間だけ力が倍増するわ。彼のことしばくんでしょ？」

「なんや、聞こえてたんか。」

「まあね。」

「蘭ちゃんー！」

「青子ちゃん！？」

な、なに！？双子だったのこの人。

「アホ子。何回人ん家走るなって言えばわかるんだよ。」

今度は工藤君の双子!?

なんだか騒がしくなりそうだ。

双子！？（後書き）

蘭「本当に和葉ちゃん、服部君のことをしばくのかな？」

和葉「あつたりまえやろ！」

蘭「あ、はははは」

和葉「逃げたときは、蘭ちゃん、協力頼むで！」

蘭「あ、うん・・・」

桜桃：大丈夫なのだろうか・・・？

ほらね、

大阪弁。変だったでしょう？

しつこいようですが、笑わないでください！！

かわいそうなんだけど・・・？

「もー。バ快斗！！子供の前でアホ子って言わないでよ！」

「いやだね。お前だって言っただろ。子供の前でバ快斗ってさ。」

「むー。」

「まあまあ。」

「そういや、新一は？」

「服部君と一緒に事件に行ってるの。」

「そう。つまんねーの。新一、平次と出かけたんだ。」

「ごめんね。」

黙々と私達がいなかったかのように話を始める。

「あつ、こちら、新一の大学友達なの。」

紹介してくれた。

「そして、この人は、服部君の奥さん服部和葉ちゃん。」

「あの色黒や。覚えとるやろ？」

あー。  
あの人。

「この人は黒羽快斗君。その奥さんで黒羽青子ちゃん。」

「この2人と蘭さん、工藤君は全くの赤の他人よ。似ているけどね。」

「えー！？！？！？！？」

嘘でしょう？ た、確かに、この世に似ている人は3人いるっていうけど……ここまで……

「あはははは。ま、新一が帰ってくるまでまってね。」

そして、  
30分後

「ただいまー。って快斗来たのか？」

「新一ー！会いたかったよお。」

か、快斗君だっけ？が抱きついた。しかも・・・声は女の人！？！？！

「き、気色悪い！変な声だすなよ。」

「なんだよ。 蘭の声 新一、こっちのほうがよかった？」

「あー！お前の姿で蘭の声を出すと気持ち悪いんだよー！！」

「じゃあ、今度は蘭ちゃんに変装して出してあげるよ。」

「やめろー！！」

なんか・・・また、私達の存在忘れられてます？

「やめてよ！蘭ちゃんの美しい姿が快斗のせいだけがれたらどうするの？」

「・・・青子、前から思ってたけど、蘭ちゃんと同じ顔してどつて蘭ちゃんと似てほしいところはにねえんだよ。」

「どこ見て言ってるのよ！バ快斗ー！」

「わー！だからアホ子はお子様なんだよー！！」

「なんですつてー！！」

完全に忘れられてます。はい。

「あれ？工藤君、平次は??」

「服部か？なんか寒気がする。嫌な予感するんや。先帰ってくれ。って言われたからなあ。知らないな。」

「ちっ、平次いつの間にそんなに勘がするどくなっただんや？あと一歩やったのに。」

「どうしたんだ？和葉ちゃん。」

「服部君に一発お見まいするつもりだったみたい。それで、哀ちゃんに一時的に力倍増になる薬貰った

の。」

「ははっ、服部来なくて正解みたいだな。」

「クスッそうね。」

「あれ？そう言えば、コナンとアイリと平太と紅葉と真人と葵は？」

「ああ。そこで寝てるわよ。」

ベビーベットに続き、布団が敷かれていて、そこに仲良く寝ている。

「そっか。」

「それにしても、平次ちょっと遅いんとちゃうか？もう、1時間以上経ってるで。」

「そうだな・・・電話でもしてみつか。」

「うん。工藤君お願い。あたし、携帯忘れてしもつて。」

「気にしないでいいよ。」

「ありがとう。」

そして、電話をした。

「あ、服部か？」

「今、どこにいるんだよ。和葉ちゃん心配してるぞ。」

「・・・はー！？なんでそうなんだよ！バカか！」

「とりあえず、今日はそっちにいる。後は知らん！じゃあな。」

ピッ

「どうしたの？新一。」

「ああ。実はな。」

くさっきの会話

「あ、服部か？」

『ああ。工藤か?』

「今、どこにいるんだよ。和葉ちゃん心配してるぞ。」

『実はな、俺の勧は多分まちごうてへんって確信してな。それで夢中で逃げてたら・・・』

「なんや知らんところにおってな。そこらにいる人に聞いたら「ここは山形ですよ」」

「って言われてな。帰る思たらすっごい田舎らしくて今日のバスはもう来ないらしいんや。」

で、工藤。お前の車で迎えに来てくれへんか?』

「・・・はー!?なんでそうなるんだよ!バカか!」

『なんでバカ呼ばわりされなあかんねん。な?ええやろ?工藤君』

「とりあえず、今日はそっちにいる。後は知らん!じゃあな。」

『あ、ちょーまで、くど・・・』

ピッ

く終了く

「って訳だ。」

「ちょっと、服部君が可哀想じゃない！迎えに行きましょう。」

「蘭ちゃん、ええんや。」

「和葉ちゃん？」

「あのアホが頭を冷やすいい期会や。そのままにしとき。」

「で、でも。」

「ほら、和葉ちゃんもこう言ってる事だし。服部も和葉ちゃんに迷惑かけてる分の少しの償いだと思えばいいだろ？」

「う、うん・・・」

工藤君の奥さんは気が進まないのか曖昧な返事をして

了承した。それにしても、あんな工藤君始めて。

誰にも優しいと思ったら・・・やっぱり、仲のいい友達との接し方は違うのね。

こうして、時間が過ぎようとしていた・・・

バレそう！？バレない！？

一行に話を止める気配がないのは気のせいだろうか。

未だに私達に気がつかないのか、それとも話ちに夢中になってしま  
ってるのか

話し込んでいる。でも、あの人たちの会話がおもしろく、一つのお  
笑い番組

のように見ている。たまに出てくるわけのわからない会話もあるが・  
・

例えば、

「コナン君のときは」

「元に戻らないのかな？哀ちゃん。」

「怪盗の名が聞いてあきれるぜ。」

「正しくは元、怪盗だ。」

「中森警部、灯台下暗しだったよな。」

「それを言うならおっちゃんだつて。」

つと、よくわからないこの会話。到底理解が不能。

「あ、あの……」

「あつ、おめーら来てたのか？」

やっぱり、気がついてなかったのね。

「気がつかなかったのか？」

「ああ。悪いな。」

「別に。それよりさ。薬だのコナンだっただの。怪盗だの。何の話だよ。」

「え？あ、そ、それはさうなあ、蘭。」

「わ、私に振らないでよ。ねえ、和葉ちゃん。」

「あ、あたしに言われてもなうあ、青子ちゃんのほうがいいんじゃないかな、青子ちゃん。」

「わ、私より、か、快斗のほうが詳しいよ。ね、快斗。」

「は、半分は新一のほうが詳しいだろ。な、新一。」

こうしてぐるぐると話題を回していく。

「ストップ。なんかあやしいな。」

「そ、そんなことないぞ。」

「そ、そうよ。」

「そ、そうやで。」

「う、うん。」

「あ、あたりまえだ。」

ますます怪しい。なんかあるわね。

「隠すなんて・・・ひでえな。」

「しょうがないじゃない。」

「は、灰原!？」

「あなた達に話しても理解できないわよ? なんせ、SFみたいな話だし。ね、工藤君?」

「ああ。お前らに話したところで理解なんてできねえよ。それに、お前らとは付き合いは薄えしよ。」

「ひ、ひでえ。」

「悪いな。」

「わかった。深くは追求しねえよ。誰でも言いたくねえこと、あるしな。」

七瀬君は大きく息を吐いて言った。

「そう言ってもらえるとありがてえよ。」

その場でこの話題はなくなった。

そこで、秋音が一つの話題をだした。

「でも、工藤君の奥さんも大変ですよね。」

「え？」

「だって、探偵ってつねに生と死の隣合わせでしょ？」

「そうね。やっぱり、心配よ。」

「蘭……」

悲しそうな顔をする工藤君。

「でも、信じてるから。」

「「え？」」

私と秋音、2人して間拔な声をだしてしまった。

「新一ね。音信不通で、会えないとき、

『いつか必ず絶対、死んでも戻ってくるからそれまで蘭には待っててほしい。』

って言うてくれたの。だから、その言葉で半年以上まっていたね、プロポーズのときも『絶対守る。』って言うてくれた。

『お前よりさきには逝かねえ。』って

言うてくれたの。だからね、安心して送り出せる。」

工藤君の奥さんは優しい瞳をして、女の私でもぐらうときそんな顔で

にこやかに言った。

秋音は何も言えず、ただ黙っていた。

「よかったわね。物分りのいい奥様で。」

「だろ？」

「彼方の惚気は毎度毎度聞かされるけど、そこまで開き直られたらむかつくわね。実験台にしたいくらいに。」

「じよ、冗談だろ？」

「さあ？でも、彼女みたいに誰も疑わない天使になってみたいものだわ。」

そして、白く、汚れない真っ白な魔法の世界へ旅立ってみたいもの。」

「じよ、冗談だろ？」

「冗談よ。」

やっぱり、この少女には違和感をあたえる。

でも、あえて追求はしない。

すると秋音が食い下がらないみたいで

「でも、心配くらいするでしょう！？」

「そうね・・・しないっていったらやっぱり嘘になるわ。心配で心配でたまらない。」

「蘭、もう、お前の前からは居なくならない。って言っただろ？」

「うん。信じてる。ちゃんと信じてるから。新一の言葉。」

2人の周りにはハートが散っていた。

私は正直、この場所にいるのが辛かった。

好きな人がその好きな人の好きな人のラブシーン。

絶えられるわけがなかった。

あつまゝいひと時。(前書き)

甘みじつとらけそつです...

あつまゝいひと時。

「じゃ、俺たち帰るわ。」

「お、そつか？」

「おお。じゃあ、また明日な！」

「おお！またこいよ！」

「ああ！」

私達は七瀬君に連れて行かれながら工藤邸をあとにした。

「じゃ、今日の夜はこの、カメラで2人の絆がどれほどが見ましようか。」

「「え？」」

「さっき、七瀬君と工藤君が話しているときこっそり付けちゃったのよ。」

ナイス！秋音！！

「じゃ、そういうことで、七瀬君の家へレッツゴー！」

「「おー！」」

\*\*\*\*\*

く八時く

「さあ、見るわよ。」

かちや ピッ

『蘭、今日はあわただしかったな。』

『そうね、でも楽しかったな。』

『そうだな。服部は明日帰ってくると思うし。今日は2人でゆっくり過ごそうか?』

『うん。』

『な、蘭。明日、結婚記念日だろ?』

『よく覚えてるわね。』

『バーロ。お前と子供達の誕生日とこいつの記念日は忘れねえよ。』

『自分の誕生日とバレンタインとクリスマスと・・・ハロウィンとかは忘れるのに?』

『別に忘れてもお前が覚えてるからいいの。』

『めちゃくちゃ〜』

『うつせー。』

「別に、普通の会話じゃない。」

つと秋音が言う。

『でも、私新一に言わなきゃいけないことあるの。』

『なんだよ。』

『生まれてきてくれてありがとう。好きになってくれてありがとう。』

『こんな素敵な家庭を築いてくれたこと、私が今幸せなのは全部新  
一のおかげだよ。』

『そんなの、お前に比べたら天と地ほどの差があるぜ?』

『え?』

『俺がさ、お前と事件で何ヶ月もはなれたとき、お前が悲しければ俺も悲しくて、

お前が嬉しかったら俺も嬉しくて、お前がそばにいないだけで  
イラついたりして。

俺の世界全部、お前中心に回ってたって気付いた。

そして、その世界はお前に助けられているってこともわかったん  
だ。』

『世界中心って・・・』

『別に、お前のためならどんなことでもするさ。』

『命を捨てるくらい？』

『ああ。お前を守るためならどんな犯罪だってするし、命だって捨てる。お前が幸せなら

生きているなら、お前の頭から俺の存在が消えうせることになっても良い。』

『大丈夫！私は絶対新一から離れない。私の不幸は新一と子供達が不幸になること。』

そして、最も恐れているのは新一と子供達が離れていくこと。私の世界も新一中心だよ？』

『そうだな。俺が恐れていること、ピッタリおんなじだったぜ？』

『本当？』

『ああ。』

『そっか。私達結構気が合うよね？』

『何を今更。気が合うことは今に始まったことじゃねえよ。』

『そうね。』

『蘭、世界で一番愛してる。』

『え？』

『キザかしんねーけど、本当だぜ？』

『嬉しい。けど、子供達は?』

『あいつらはきっと、自分を世界一好きで居てくれるやつが現れる。だから、

俺の一番は、お前。あいつらは一番(2)ってどこかな?』

『なによ、その(2)って・・・』

『気にすんなよ。』

『でも、ありがとう。私世界一幸せだよ。』

『俺がいるからな。』

『自意識過剰・・・』

『あんまりうるせーこと言うと、その口塞ぐぞ?』

『だったら、塞いでみてよ、探偵さん。』

そして、2人の陰は一つとなった。

ピッ

秋音が途中で切ってしまった。

「こ、この続き見れる!？」

ブンブン!

私と七瀬くんは首をい思いっきり横に振る。

「でしょ?」

「あーあ。この2人がこれほどとはね。」

「あんな顔した工藤君、見たことないぜ。」

「色っぽい顔してたよね。」

「ああ。」

はあ。諦めなきゃいけないよね。

吹っ切れなきゃ。

よしっ。

「七瀬くん、ベランダかりるね。」

「お、おお。」

そして、私は思いっきり息を吸った。

「工藤新一のばかやろー！なにが救世主よ！あんなのただの男よ！

奥さんが居ないと何も出来ない男よ！

奥さんが居なかったら死んじやうようなダメ男じゃない！

あんな人・・・あんな人・・・もぉー！かっこよぎるんだから！」

「ちょ、ちよつと・・・やめなさいよ。

里美！近所迷惑よ！」

「あつ・・・ごつめーん。」

「じゃ、山でも行くか？」

「え？」

「よつしや、山で工藤の悪口いふらそーぜ？大声で。

山だし、近所迷惑にもならねえ。しかも、結構スッキリすると思っぜ？」

「そうだね。」

私達はこの後、大声を出してストレス発散した。

工藤君が聞いてるとも知らずに。

— E N D —

あつまゝいひと時。(後書き)

まさかの新一が聞いていた！  
です^^

オ・マ・ケ

「でも、新一よくあんな恥ずかしい台詞いえるわね。」

「本心だったからな。」

「え？」

「お前はちがうのかよ？」

「・・・そうよ！私だって本心よ。」

「だろ？」

「でも、よく、隠しカメラがあるって気付いたね。」

「ああ。あきらかに行動が怪しすぎたからな。」

「ふん。」

「ま、俺もあいつらに盗聴器つけたからな。おあいこだろ?」

「え!いつのまに!？」

「俺はあいつらみたいにこそこそせずに、怪しまれないよう、七瀬のフードの中に  
さりげなくいれたんだ。」

「・・・よくやるわ。」

「それほどでも。じゃ、聞こえつぜ。」

「え〜。」

「あいつらだって人のプライベートを盗み見たんだ。これくらいいいだろ?」

「うーん・・・」

くくく

『でさ、工藤の奴、バカなんだよ。あれでよく、探偵やってられるよな。』

『言えてる〜』

『いい女には必ず2人は男がいるって言ったら急に青ざめてやんの!』

「あ〜い〜っ〜ら〜!〜!」

「まあまあ。」

『でも、工藤君も男ねえ。』

『え?』

『いくら、冷静沈着といわれても、再々の奥さんのことになると  
今までの面影もなくなる。』

『最もだ。』

『『わははははは』』

「ゆるさねえぞ。明日覚えてろ、七瀬。」

「新一可愛い」

「どこがだ。」

「すねない。すねない。」

『じゃ、いつちょはじめろ!』

『『おー!!--!!--』』

「何始めるきなんだ、あいつら。」

「さあ？」

『工藤新一のばかやろー！』

『ラブレター捨てやがって！自慢か。もてる奴の余裕の自慢か！』

『救世主ってなによ！奥さんのことになるとただのバカな男じゃない！』

『昨日だって女の子振りやがって！可愛かったんだぞー！あの子！』

『振られる身にもなれー！』

『この前だって大学のアイドル、松下夏実ちゃん！振りやがって！俺、密かに狙ってたんだぞー！バカやろー！』

『何様だー！』

『モテナイヤつの身にもなってみろー!』

『『そうだそうだ!』』

ピッ

「めちゃくちゃだな。」

「でも、けっこう純粹なんじゃない?」

「それに、俺には蘭がいる。どうやって振らずに返事しろっつんだよ。」

「あははは。」

「な、蘭。今日は皆寝てるし、俺、あいつらにあんなこと言われて結構心折れてるし、長い夜つかって慰めてほしいんだけど?」

「私でよろしかったら慰めますけど?」

クスッ

そして、そのまま

長い夜を体験する――





——ハズだった。

「くどくど！」

「服部！？！」

「なんで・・・？」

「走っておったら、電車の駅についたんや。」

なんて運のいい・・・

「平次！邪魔しちゃあかんやろ。」

「和葉・・・？」

いつものまにか皆居た。

「折角の夫婦水入らずが台無しや・・・あなたのせいだな！」

「え・・・？そいや・・・ いやゝすまんすまん。どうぞ続けてな。」

こっちには気にせんでええから。」

じゃ、遠慮なくって・・・できるかー！！

こっつて、

2人の甘い時間は

『騒がしく』幕を閉じた。

オ・マ・ケ（後書き）

新一「いいところだったのよー・・・」

桜桃「まあまあ」

蘭「服部君、妙に運がいいから。」

桜桃「そうでもないかもよ？」

新蘭「え？」

和葉「へーいじー？まああたしに内緒で  
勝手に事件に行つて・・・」

平次「勘弁せえ！和葉！！」

和葉「黙らんかい！いつもいつも、あーったまくるわ！  
黙って行かれて。」

平次「すまん。」

和葉「謝って済んだら警察はいらんちゅうねん！」

桜桃「ね？」

蘭「ホントだ。」

新一「服部、帰ってこないほうがよかったんじゃないか？」

桜蘭「た、たしかに・・・」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4035m/>

---

見た目で判断は禁物 ！?

2011年10月7日03時46分発行